

リゲジヨ発ビジネス開花

創薬後押し タンパク質合成試薬 発売

名古屋大発のベンチャー企業「NUProtein（エヌユープロテイン）」が、研究用タンパク質の合成に使う試薬の販売を始めた。合成にかかる時間を大幅に短縮したのが特徴で、がん細胞の増殖を抑える薬などの開発を後押しする。二十代の女性院生が自分のために考えた方法が評判を呼び、ビジネスにまで発展した。（曾布川剛）

タンパク質は、さまざまな病気の治療薬の効果やアレルギー反応などを確かめるために使われる。通常は人間の細胞の中で作られる

名大ベンチャー

同社の技術では、小麦の胚芽からタンパク質を合成する機能だけを抽出し、これに遺伝子を加えてタンパク質を合成する。大腸菌を使う方法で必要な遺伝子複製工程を省くことができ、

一日程度で必要なタンパク質を合成できる。大腸菌が死滅してしまったために合成できなかった酵素や膜タンパク質なども作れるようになり、細胞のがん化を止めたり、細胞の過度な光の感知を抑えたりする新薬の開発が期待できる。

開発したのは、取締役を務める名大大学院理学研究科博士後期課程の野元美佳さん（三〇）。修士課程の研究で植物の免疫機能を解析す

るのに大量のタンパク質が必要になり、短期間で準備できる方法として二〇二二年ごろに自ら考えた。

「自分の研究を効率よく進めるために工夫しただけ」と振り返るが、研究論文を通じて広く知れ渡り、国内外五十八の大学・研究機関から合成依頼を受けてきた。

一五年にはタンパク質の合成過程を特許出願。小麦の胚芽から抽出した合成機能などを試薬として販売するめどがたち、昨年八月に起業した。日本政策金融公庫から千九百万円の融資を受けて遠心分離機などの設備をそろえ、今月から販売に乗り出した。

試薬の市場規模は千八百億円。同社の試薬は製造方法が簡単そのため、価格が五万五千円と先行他社の半額程度に抑えられた。名大の元特任講師の南賢尚社長は「医薬品メーカー以外にも

農業や食品関連企業など幅広い分野の研究・開発を加速させられる」と期待を込める。



タンパク質を合成する試薬を準備する野元美佳さん（左）と南賢尚社長（名大）

屋市千種区の名古屋大で